

エドワード・ヒグビー

『都市時代における農場及び農業者』

Edward Higbee, *Farms and Farmers in an Urban Age, The Twentieth Century Fund, New York, 1963.*

山内豊 二

ている環境を都市時代と規定している点は興味深い点である。また彼の抱く都市時代の農民像は、近代的意識をもった資本家的企業者の像であり、伝統的農民像を過去のものとしており、今日のアメリカの農業における諸問題——とくに農産物の過剰生産と多数の低所得農場の存在——は伝統的農業政策が伝統的農民像の上に維持されているために他ならないとし、新たな方向を示唆しようとする。このいみで本書は、伝統的見解にとらわれることなく極めて卒直に近代農業の展開とアメリカ農政の矛盾に光をなげかけているいみにおいて、われわれに農業に対する新たな見方を教える。

本書の構成をみると次の五章からなっており、またその文章は闊達、魅力的なものである。

- 第一章 技術革新
- 第二章 アメリカの農業者とは誰のことか
- 第三章 アメリカ人の頭のなかにある農場
- 第四章 土地と空間に対する需要
- 第五章 討論と決心

二

次にヒグビー教授の考え方をきこう。

著者エドワード・ヒグビー教授は、アメリカ合衆国ロードアイランド大学で土地利用学 (Land Utilization) を担当しているが、土地利用に関する彼の考え方は、総合的視野にたつて論じている点で極めて斬新なものがある。本書は、今日のアメリカの農業問題を、基本的には著者の専門である土地利用の視点から考えようとしているが、この場合むしろ土地利用を左右する基本的な社会経済的基盤の上に光をあてて、これを表面に出して農業問題の核心をついている点は注目し値する。とくに題名に示されている通りヒグビー教授は、今日の農業のおかれ

模な機械化の進歩がアメリカ農業にどのような衝撃を与え、どのような農業問題を齎しているかを論じる。

教授は、まず今日の農業は伝統的哲学の上になつたものではなく、高度な企業 (High-Speed business) となつたとし、最近の技術進歩がいかに目覚ましいものであり、それが農場経営の集中 (Concentration) と専門化 (Specialization) という現象をとって農業構造を变革していることを指摘する。

まず技術革新については、最近の機械化の具体例をあげてその巨大な能率を示している。例えば、一エーカー当り作物生産の労働所要時間について、小麦では二時間、とうもろこしでは四時間といった驚くべき現在のアメリカ農業の姿を描く。また蔬菜、果樹といった労働集約的作物も新しい機械によって機械化が進展している事実を示し、「近代農業の能率は宇宙の征服にも似た途方もないことで、人類の福祉にとってはそれ以上に意義のあることである」という。

またかかる機械化が農村に与えた矛盾した結果として、機械化は、都市以上に農村における労働能率と生活水準の改善をもたらしたにも拘らず、国民のうちで最も貧困な人々が農村にみられる事実、及び食糧の過剰生産のなかで、適切に食べることができず栄養不良となるのは農業者及び農業労働者にみられることを指摘している。また技術進歩が非農業以上に能率的であ

るにもかかわらず、一世帯当り農場所得は、都市の一世帯当り所得に比らべると約二分の一である。何がこのような矛盾を生むのか、これに教授は答えようとする。

農業所得の相対的低位性という問題は、平均的結果であつて、これを農場規模及び所得の構成から検討すると結果は同一でない。資本装備も豊かな近代的農業経営者層のあける収益は素晴しく大である。また小規模農業経営者 (アメリカ全農場数の六一%、二二〇万) は農場所得以外に農外所得 (前者の約五倍) があり、これを加算すると所得水準からみて都市に著しく劣るとはいえない。ただ専業経営者層で最近の技術を導入しえず取り残されて、低所得にあえぐ階層のあることも明白な事実である。従つて、一把ひとからげで農業が貧困という病氣にかかっているとみることとは、誤りであると教授はいう。そして今日全農産物販売高の八七%が総農場数のうち三九%の農場 (一四〇万農場) によつて生産されている事実からみて、残余の二二〇万農場が分解したとしても総生産はかわらないことが考えられるので、むしろ零細農が農業以外のよりよき働き場所をいかにして発見するかが、農業における社会問題解決の問題点である。しかし都市のスラムにはすでに近代農業が析出した無数の農業労働者が集中しているのが現状である。農業の困難を救済するため連邦政府は、農業支持計画に対して多額の財政支出

を行なっているが、皮肉なことに連邦政府の支出した金額に比例して農場数、農業者数が減少しているし、また農産物過剰も大となっている。

農業における技術革新の影響を考える場合、農場の資産評価価値の増加 (Capital gain) と農業労働所得の低位性が問題となる。農場の資産価値は年平均八・五%の上昇をみているので、このいみでは農場の所有者は毎年 Capital gain の利益をうけるのであるが、農場からの労働所得は極めて低く、ために土地をもたない農場労働者は最もみじめである。農場所有者は農産物の価格支持を希望するが、農場労働者の最低賃金制に反対している。一九六二年都市産業労働者は、一時間二ドル三六セントであるのに対して、農業労働者は一時間八四セントであることがこれを示している。これはメキシコ人や西印度諸島からの農業労働者をも包含されているとしても、とにかく低い賃金水準である。従って、小規模家族農場の家族労働報酬は、競争関係を通じてこの水準以上に高めえないのである。このためこの階層は都市に働く場所があるかぎり、小規模農場をうり、しかも Capital gain の利益を得て脱農しようとする態勢にある。この事実を、要するに巨大な資本の投入と耕作面積を拡大することなしには、現在の最新の機械、優秀な家畜を利用することによって最大の利益をあげえないのである。大規模生産に

よる生産費の低下以外には成功の道はないのがアメリカ農業の現状である。このことが、土地に対する需要が高い理由でもある。

農業生産の技術革新は、流通構造の変化をもたらしている。その一つの形態は契約農業である。いわば生産者が加工業者から融資をうけ、一定の固定価格の保証をうけて契約生産を行なうのである。これが最も典型的なものはブローラー生産であり、養豚、肉畜、牛乳生産でも発展しつつある。契約生産が成立するのは、加工業者に品質がよくて一定の規格をもった生産物を大量に供給しうる大規模生産構造が、技術革新によって作られたために他ならない。農業者が契約農業に参加することは加工業のなかに系列化されることであり、農民の自主独立性はなくなるわけで、生産から加工までが統一化されることとなる。これは技術革新によってつくられた近代農業が、産業的性格をもつようになったことを示していると教授はいうのである。

ファーマース、ビューロー (Farmers' Bureau 筆者注、大規模農業経営者階層を代表する農民団体) は契約農業のもとでは農業者が伝統的な自主性を失なうことになる。契約農業に反対し、農業者自らが協同組合を組織することを主張し、これを応援しようというのである。そして今日農業人口は減少したが協

同組合の力は増大している。一九四〇年は六三〇万農場のもとで協同組合は全生産物販売高の二〇%をあつかつているが、一九六〇年には三七〇万農場のもとで協同組合の扱いは二八%に増大していることはこの事実を示している。協同組合でも柑橘、レインズ等の協同組合は、最も成功している事例で、厳格な品質管理と規格統一のもとに市場とくにマンモス的なチェン・ストアに結合し経営が成功している。これは一方では協同組合、他方ではチェン・ストアの二つを垂直的に統合して所謂アグリビジネスの能率化からの利益をあげているために他ならぬ。

何れの流通構造にしてもアメリカ農業繁栄の途は、人工的につくられた購買力によるのでなく、農業経営の能率の増大によって達せられるのであり、この意味では資本装備の充分な大規模経営が優越するのである。しかも今日の過剰生産のなかで農産物の価格支持に対する関心は大であるが、農村における過剰な人間（小規模経営の過剰）に対する認識が少ないのが実状であると教授は指摘する。

第二章では「アメリカの農業者とは誰のことか」と題して、ヒグビー教授はアメリカ農民の範疇について一九五九年センサスのデータを中心として論じる（第一表）。

第1表 1959年における農場の階層区分

農場階層	農場数	百分率	販売額 価値	純生産額 価値	農場販売額 の百分率
Elite	1,200	1 -	50~	14	4.6
Jr. Elite	21,000	1 -	10~50	38	12.4
Blue Ribbon	80,000	2 +	4~10	44	14.5
第1階層の残り部分	210,402	6	2~4	56	18.4
中間上層	483,004	13	1~2	67	21.9
中間下層	1,271,558	34	0.25~1	70	22.8
第3階層	1,640,910	44	~0.25	16	5.3
計	3,708,000	100	306	306	100.0

注 Census of Agriculture, 1959, vol. II
本表の農場階層とセンサス階層区分の関係

Elite, Jr. Elite, Blue Ribbon ...Class I Commercial
第1階層の残り部Class II Commercial
中間上層Class III Commercial
中間下層Class IV & V
第3階層Class VI 及び Part-time, Part-retirement

農業センサスで農民として数えられる人々のうち、四四%の一六〇万農場の農業者の平均農業所得は二一七ドルで、平均農外所得は二八四ドルである。この階層をヒグビー教授は第三階層となづけている。この第三階層を構成するのは隠退した人か、パート・タイム農民か、趣味として農業をやる人々が大半であるが、このうち三五万家族は極めて貧困である。その年収入は農業収入、兼業収入あわせて一、〇〇〇ドルにみたない。この人達は農業でなく非農業に職を求めるべきである。要するに第三階層全体についていいうることは、これらの人々は農業者とみなすことはできないとヒグビー教授はいう。それは農業の技術革新と経済の変化を考えると、労働型農業者は農業経営から消え失せ、資本型農業者がこれからの農民となる人のタイプとして考えられるからである。資本なき農民はアメリカでは不幸な人々となるという。

第三階級に対象的な第一階級をエリート、ジュニヤ・エリート、ブルー・リボンという分類をヒグビー教授は行なっている。

アメリカ農業のピラミッドの頂点には年間五〇万ドル以上の販売額をもつ一、二〇〇の農場がある。これがエリートである。特筆すべきことはこのエリート一、二〇〇農場の総販売額は第三階層一六〇万農場の総販売額に等しいということである。エ

リートの一農業者は第三階層の千人の農業者と同じだけの生産力をもつことになる。

またジュニヤ・エリートは年間販売額は一〇万ドル〜五〇万ドルで、その数は二万一千農場、ブルー・リボンは年間販売額は四万ドル〜一〇万ドルで農場数八万である。エリート、ジュニヤ・エリート、ブルーリボンの各農場数の合計は、一〇万二千農場（アメリカ農場数の三%）でその生産価値は九六億ドルであり、アメリカ総農業生産額の三一%である。従ってこの種の農場が三〇万あるとアメリカの必要農産物は生産されるとヒグビー教授はいう。なお年間販売額二万ドル〜四万ドルまでの販売額をもつ農場（第一階層の残余とよばれるもの）は二一万あり、これを前の三つの分類に加えると第一階層の農業者は全農業者の八・三%で、全国生産高の五〇%を生産することとなる。

第一階層と第三階層との間に中間階層がある。これには中間上層 (Upper middle class) と中間下層 (Low middle Class) とがある。前者は四八万農場でその販売価値額は一農場当り一〜二万ドルであり、後者は一二八万農場で一農場当り販売額は二、五〇〇ドル〜一万ドルということになる。中間下層の大半の経営主は四五才以上の人であり、彼等の後継者は不足しており、この人々が第三階層に入るのはい間もなくであるし、都市に

書評

エドワード・ヒグビー『都市時代における農場及び農業者』

二〇四

職さえあれば農場を去る層である。

次にどのような階層が成長し、いかなる階層に生産が集中してきたかをみると、次のようになる。

	農場数		全国の農場販売額 に対して各層の農 場販売額の割合
	一九五〇年	一九五九年	
第一階層及 び中間上層	四八万	七九万	五二%
第三階層	三三〇万	一六〇万	一二%
中間下層	一六〇万	一二七万	三七%
			二三%

これから明らかなように第一階層と中間上層が延び、第三階層及びその周辺にある中間下層は減少しているのが過去から将来への傾向である。このような傾向に対して連邦政府が農業の不平等な階層に行なっている高価な援助は、余り役にたつておらず、逆に上層を有利にしているので、税金を支払う人々は政府は農業に下手な援助は止めるべきであるというのである。そうすれば能率的な農業者がこれにかわるという主張をするようになった。これは帰するところ大農場の経営者は労働所得よりも投資に対する資本利潤の上に収益を求めているために他ならぬ。また Big agriculture is big business なのである。そしてこの人々は市場、金融、政治のつながりの上でトップに立

ちるのである。

家畜飼養者を一例として示すと、飼料の大半を購入する大飼養者と自給飼料で飼養する小規模な農業者との比較である。今日、流通構造が変革し加工業とその加工生産物の販売機構は同一資本のもとで統一されている。この場合、加工業者は原料の大量供給を期待しているので家畜飼養方法も大規模飼養によって大量供給を狙うようになった。飼料は購入する関係上、利潤率は高くないが、大量で利潤をあげようとするのがこの行き方である。労働所得に依存した伝統的家畜飼養経営は、現行の雇傭賃金率(都市勤労者に比して遙かに低い賃金)以上の労働所得をあげることは困難となる。このため大規模飼養者は飼料価格をあげる生産統制には反対する。そしてこの考え方は Farm Bureau の声となる。これに対して飼料価格の高い価格支持を小農は主張する。その声は National Farmers Organization あるいは Farmers Union の主張となってくる。

第三章の「アメリカ人の頭にある農場」ではヒグビー教授はアメリカ民主主義のバックボーンといわれた家族農業の変貌、衰退についてのべ、資本家的企業農業に移行している過程を論じている。

教授はまず一八世紀末におけるヨーロッパの農民が新大陸で

自己の所有地で独立しうる自由を与えられた自由人の喜びと満足を物語る手紙集を紹介している。そのなかにアメリカの家族農場の牧歌的なイメージが育っていることを示している。またグリズウォードの著書『農業と民主主義』(Grinstead, *Farming and Democracy*) を引用して、いかに家族農業が民主主義のバックボーンとして意義があったかを説明している。しかし今日、農場の家族は大地を去り人口の九二%が都市に住んでいる時代に、家族農業が民主主義のバックボーンというのかどうか疑問であるとする。農務省の見解としては今日、経済的に堅実な家族農場は増大し不堅実なそれは減少しつつあるとしている。しかしこの家族農場といわれるものは前述の第一階層以上のもので、より資本装備を充実し、雇傭労働力により依存したものであることを考えると、植民時代以来偶像視されてきた所謂小規模家族農場が凋落しているように考えられる。現在の都市産業文化の緊急な課題の一つは、小規模な家族農場の消滅により失なわれつつある家族農業がもっていた社会的価値に代るべき価値を、いかにして都市産業文化のなかに創造するかということである、とヒグビー教授は指摘する。

次にヒグビー教授は、今日新たなパターンとして登場しつつある大規模農業経営について論じる。彼はスペインの植民地時代にとられた農業組織である所謂 Spanish *Hacienda* にその原

型があるとしている。Hacienda とは本来土地の区画のいみであるが、スペイン人は植民当時自ら耕作するアングロ・サクソンの方式——アングロ・サクソン方式が家族経営として成長したのであるが——をとらず、広い土地を所有し、ここを征服したインディアンに耕作さす方式をとったのである。この場合、その土地に働くインディアンは征服者によってそれぞれの *Hacienda* に割当てられたものであるが、この割当を *Economista* といっている。このような Spanish *Hacienda* はアングロ・サクソンの植民方式の発展の中で姿をひそめていたが、テキサスからカルフォルニアの南西部では *Hacienda* はそのままの広さで残存し、今日の工場制農業の基礎となったという。ヒグビー教授は勿論現在の *Hacienda* とインディアンの手労働時代のそれとはその内容は全く異なっていると、今日のそれは平均的にみて(1)年販売額四万ドル以上の農場、(2)平均規模二、四六六エーカー、(3)五台以上のトラクターを所有しているもの、(4)一〇人以上の雇傭労働者をもつ農場であるとしている。今日これらは農業のあらゆる分野と地帯で小規模農場の消滅の上に大規模な機械化を通じて徐々にではあるが増加しているのである。そしてこの多数の *Hacienda* は家族によって所有されている関係上、農務省が適正家族農場とよぶものもこのなかに包含されているのである。

Hacienda 農業の前進と資本関係について、教授は次のようにいう。Hacienda の成立のためには巨額の固定資本と少なくとも二五万ドルの資金は必要であるという。このような資金源は何処からきたのであろうか。一部は農業利潤の蓄積によって

もたらされたが、石油採掘権や都市の発展に伴って値上りした近郊農場の販売に伴う資本利益 (Capital gain) がしばしば資金源となって地価の安い地帯の農場に再投資されて Hacienda の型をとるわけである。スペインの初期の植民地帯が主要石油生産地帯であることを考えると、このようなことは充分理解できる。また、過去二〇年間の爆発的な都市の成長はこのことを充分予想させる。しかも農業に対する税金上の便益は農業投資を魅力的なものとしているから、前述したようなルートで農家に入った巨額の金が農業に再投資され、最新の技術を利用した Hacienda 型の農業経営が発展すると教授はいう。とくに都市の発展に伴う都市周辺の農家の農場売却 → Hacienda 型農業への投資という傾向は中西部の農業中心地帯及び都市化された大西洋岸地帯に顕著なものがあるという。

第四章では「土地と空間に対する需要」と題して都市の発展に伴って都会人の空間に対する需要が増大して農業と競合している事実及び農業部門では過剰生産をかかえながら土地に対す

る需要は増大し、土地価格が上昇していることを教授は指摘して、この原因を今日の農政及び土地利用を規定する条件のなかにとめている。

一九六一年の農村人口は僅かに総人口の八%となっている。これは都市の発展とともに農村人口の都市への流出が激しいために他ならない。都市に集中した人々は空間に飢えており、狩猟やゴルフ等のリクリエーション地帯の必要性が都市の発展とともに増大する。また都市の拡大のためには建物用地、貯水池用地等益々空間を必要とする。他方農村をみると農村人口の流出にもかかわらず農場価格は上昇しており、一九五九年の価格は一九三五年のその三倍に上昇している。これは小農の売却する農地を大農が買い漁るために他ならない。そして大農場の経済的能率は小農のそれに比して遙に大であり、収益性が高いためにこのような結果となるのである。

経済発展委員会 (Committee for Economic Development略して CED) は、農業調整の中心は合衆国の農業が資源を過剰に利用しているため過剰生産となっていると主張する。そしてとくに過剰な農業者の存在のために過剰生産が生じているとしてその調整は農業者を減らすことであるという。いわば能率的な農業者群まで農民の数を減少させると生産も需要に適應するようになり過剰生産もなくなり、農産物価格支持のための税金の負

担もなくなり、納税者もこれから開放されるという。このため C・E・Dは価格支持水準を引き下げ農業生産は能率的な大規模農場で行ない、小規模農場は土壌銀行 (Soil Bank) に入れてしまうことが農業調整の適当な手段であると提案した。しかしヒグビー教授は、過剰生産は過剰な農業者にあるのでなく資本投下の過剰にあるという。一九四〇年から一九六〇年の間に農業機械や設備は二倍に、肥料使用量は四倍に増大し、人間労働力は二分の一に減少していることをみても資本の投入が増大していることがわかる。しかも価格支持水準が比較的高いので (政府の支行情格は能率的な大規模農場での生産費の二倍という) 能率的農場では収益率が大きく投資を拡大しうる。従って非能率的な小規模農場は脱落しても大規模農場がこれに代って益々資本の投入を増大し、生産の効率化をすすめて過剰生産をもたらすこととなるとし、ヒグビー教授は、過剰生産は労働よりも価格支持にささえられた資本投入の過剰にあるとする。

土地利用の面からみても農業に過剰に土地資源が配分されすぎているという。教授は公有地問題をとりあげて、これが今日のように非能率的な放牧地に利用されて、過剰生産に貢献するよりも、公有地は増大する都市社会のリクリエーションのために利用することが望ましいとする。例えば一九五〇年から六〇年までの間に国立公園へ来た人数は三千三百万人から七千九百万

人に上昇していることをみても、いかに都市の人々が野生のなかに開放されることを望んでいるかが分る。この意味で国民経済及び国民の要求に依りて四八州の土地の二一%に及ぶ連邦政府の公有地の管理の再検討の必要性を論じている。

第五章「討論と決心」ではヒグビー教授は農産物価格支持という農業政策的政策は都市時代の発展と農業構造の変化のなかでいまや終りにきていることをのべ、農業問題はむしろ都市問題に移行していることをのべている。

前章でものべられているように農産物価格支持のための連邦政府の支出は、その目的とする減少している小規模経営群の救済よりも、農務数の比率としては少ないが、その生産額が総生産額のうちを示める比率の大きい大農場の経営収入の増加のために貢献している事実は、税金を支払う市民を納得せしめていない。また一九六〇年において価格支持がなされている農産物は稗、小麦、とうもろこし、こうりゃん、酪農生産物の五種で、その価値額は全農産物の価値の四〇%にすぎない。しかもこれは比較的中農下層群に集中しているものであるが、結果的に大農層を有利にする。一方、農村の政治的圧力は次第に低下している状況である。それは農村人口の減少にもかかわらず農村地帯の選挙区から多くの議員を選出したために、従来農村の議

会における発言力が大であったのである。しかしこの時代も今や終りに近づいているように思われる。一九六二年三月合衆国最高裁判所は、人口と非常に差のある選挙区は投票の価値をうすめ個々の市民権を犯すことになると言明した。以来農村の強い政治力も弱くなってきた。選挙区制が改正され真に投票者感情をとらえるようになると、農業に対する今日の政策は都市の人々の手で変えられてしまう可能性が大である。とくに今日の農村人口はアメリカの人口の八%であり一九八〇年には約二%になるであろうという予想からもこのことは明らかである。

一方農業者間の利害は一致しない。大規模階層は兼併によって更に拡大しようとするが、小規模階層は現状の維持を計ろうとする。この利害の対立はソロモン王の智慧をもってしても解決しえない。一切の農業問題を放棄した場合でもある農業者には恩恵となり、他の農業者に破局となる。何れにせよ家族経営の実質的な特性は労働所得型から資本収益型に変化した今日、店晒しの家族経営の概念を生きのこらせようとすることはも早問題ではない。しかも今日農業補助金は年間五〇億ドル（一九五二年度は三億ドル）に達している。このことは納税者に農業には十分な公共資金を投入したと感ぜしめるであろう。またアメリカ農業に關するかぎりこの巨額の政府支出の終焉はその経営を管理し、収益をあげるために農業者により新しい努力を傾

倒さず始まりとなるであろうと教授はのべている。過剰農産物のために五〇億ドルの金を支出するより都市化に關してもっと価値のある問題に支出する途がある。もしアメリカの家族の福祉に国家政策の策定者が真の意義を求めているとすれば、人口が流出している農村をふりかえる代りに、大半の人々が住んでいる都市の前途を策定者をして考えせしめるべきであるというのが教授の結論である。

三

以上は本書におけるヒグビー教授の説述の概要であるが、本書が極めて新鮮な角度でアメリカ農業を考えている点は、アメリカ農業のみの問題のみならず所謂先進国の農業の方向なり、或は農業発展の一つの極を示すいみで意義深いものがあると思われる。しかし私は本書を読んで若干の疑問をもったので、次にこれをのべておくこととする。

第一にヒグビー教授はアメリカ農業は今日大規模な資本家的企業経営（ヒグビーの理解では大規模な資本集約的家族経営もこれに入れている。但し従来の家族経営の定義ではこの場合妥当しなくなるのであるが）への途を辿りつつあることを指摘し、その基盤は技術革新であり、また比較的有利な支持制度のもとで保護されている農産物価格にあること、そしてこのことが農

業への資源利用——とくに資本投下の過剰となり農産物の過剰生産をもたらしていることを主張している。ヒグビー教授は過剰生産が伝統的農民視に基づく農業保護政策——価格支持制度——にありとして政策の反省を求めている。今後の政策とくに農産物価格政策がどのように改められるべきかについては、教授は明白な主張をのべていないので、教授自身の考え方をすることはできないが、本書全体を通じてくみとりうる彼の方向は統制なき農業と自由競争との上に需給バランスが回復され、過剰生産は解決され、能率的農業のみが維持されるであろうという考え方が潜んでいるように思われる。しかし問題は今日のアメリカ農業にみられる能率的な資本家的企業経営への発展の傾向が、現在それを支えている柱を取り去ることによって、果して今後もつづくかどうか疑問である。今日の支持価格制のもとでは農産物価格の不安定性は排除され、資本利潤も充分期待できるので、農業に向けて資本が移動し、大規模な企業経営の成立も可能なのである。たしかに労働所得に依存した家族経営から、資本所得に依存した企業経営にアメリカ農業は変貌しているが、これは伝統的農政によって形成され促進されてきているのは事実である。従ってもしこの政策が放棄される場合、このような傾向がどのような衝撃を受けるかが問題となる。資本中心の大規模経営は、労働型の家族経営より遙かに不安定条件

に対しては経営面からみて崩壊する可能性は大である。このいみで農業を不安定の中に放り出すことなく、次第に合理化を促進するいみで今日の農業を支える柱をどのようなものに取り替えてゆくかが新たな都市時代における農政の在り方であろう。ヒグビー教授はこのいみでたんに問題提起をしたにすぎず、新しい農業の形成に極め手となる意見をのべていない点は、画竜点睛を欠くものであろう。

第二にヒグビー教授は都市問題の解決ということのをのべている。すなわち農業の中心的な担当者企業家的経営者であり、零細な家族経営ではない。競争に負けた上に農村から都市に流出しえず滞留している小農民が多いが、これは農業経済の問題でなく社会問題である。従って農産物の価格支持に支出されている政府の財政資金は、むしろ都市問題の解決のために支出され、農村に滞留している小農民に都市における雇傭の道を開くべきであるというのがヒグビー教授の農村社会問題解決の主張である。ただ本書にのべることだけでは読者にとってヒグビー教授のいう都市問題というのがどのようなことであるのか、またその都市問題が政府の財政支出によってどのような方法で解決しうるのかについては、具体的に理解することができない。この点、もう少し具体的な掘り下げ方がなされるべきであったと

思う。